

二十一世紀に適應する具體的教師像

(日蓮宗現代宗教研究所研究員) 内山善行・馬島淨圭

宮内勝典は言う。

「(既成仏教がオウム真理教に敗れた) その背景には既成仏教の墮落がある。僧侶たちの多くは、ただ寺の財産を相続するために僧侶になる。本山へ行つて、ちよつと修行して戻つてくれば、戒名を書くだけで何十万円。彼らにオウム真理教を批判できようはずがない。

若者が既成仏教にそつぽを向いて新興宗教に走るのは当然のことだと思ふ。町の一等地の、地価何億円もの寺はがらからではないか。あの広い境内に立つて、若者たちに語りかける心ある僧はいないのか。」(宮内勝典『善悪の彼岸へ』集英社、二〇〇〇年、二八四ページ)

われわれ宗門人にとつても、耳の痛いことである。宮内の言うように、確かにわれわれは若者たちに語りかけることを怠つてきたということが言えよう。語りかけなければならぬ。

しかし、この事実を踏まえた上で、これからは、その前に、まず、彼らの話に耳を傾けてやるという作業が必要ではなからうか。教師とは、法を説く人であるということ、われわれは、一方的に相手に対して教えを説くことが役目だと思つてはいないか。二十一世紀に適應する教師とは、多くを語ることに重きを置くのではなく、まず聞くこと、相手の気持ちに耳を傾けてやり、相手の心の水を飲んでやる人でなければならぬ。たとえば、宴会の席においてビールを注ぎに来る人は、自分の持つてきたビールを相手に飲んでもらいたい(自分の気持ちを受け取ってもらいたい)がためにやつて来るのである。その気持ちに答えずして、まず俺の注いだ酒を飲めと、相手に無理強いして酒

を飲ませるのはいかがなものか。どんどん杯に注ぎまくり飲ませたら、相手は気分が悪くなり、ついには酒を吐いてしまうだろう。

悩みを抱える人間のなかには、自分の気持ちを吐露しただけでその悩みが解消する者もいる。精神科医の中には、「しゃべることは治ること」と言い切る人もいる。二十一世紀に適應する教師のファーストステップは、まず聞くこと。耳を使わずして口ばかり動かす人であってはならない。相手を自分の土俵に引っ張って来る前に、まず相手の土俵に自分を置く。相手の土俵に行ったら、今度は相手を自分の土俵に渡ってこさせるのである。

さて、現代において若者が新宗教に走るという問題は、一言で言えば、アイデンティティの喪失、自分が何者だか分らないという現象である。自分自身をかけがえのない存在であるとは思えない、ということでもある。宗教学者の島蘭進は、若者が新宗教に走ることを、以前見られた「貧・病・争という動機から『空しさ』の動機」への変化だと捉えている。生きることの「空しさ」と言う動機が、若者が新宗教に走ることの重きを占めていると分析している（島蘭進『新新宗教と宗教ブーム』岩波書店、一九九二年、同『ポストモダンの新宗教』東京堂出版、二〇〇一年）。

現在の日本社会は、経済的、物質的にますます豊かさを増している。新宗教に入っていく人々は、この物質的に満たされた現代社会において、生きることの「空しさ」を感じ、人生の意義を見出せないで心が病んでいる人が少なくない。実存的な悩みを抱えているのである。そういう人たちに、日蓮聖人の教えを諄々と説き聞かせることは大事だが、聖人の教えを伝える前に、まず、そういう人たちの心をケアしてあげなければならない。その為、臨床心理講習会を宗門は開設し、教師の資質の向上を図ることが望まれる。ケアされたことによつて、日蓮聖人の教えに耳を傾け、教えの一つ一つが心の中にしみわたっていくのではなからうか。

肉体的損傷は何もないのに、ストレスによつて体の異常を訴える人がいる。いまだに医学的な原因が解明されてい

ない心の病を抱えている者もいる。あるいは、いろいろな悩みを持つてお寺に飛び込んで来る人もいる。そのような人たちに対して心の癒しを提供してあげなければならない。心のケアは、カウンセリング的なもの、心身医学的なものも含めて、教師の資質として身につけることがこれからの課題となる。病んでいる心をケアしてあげた後に、信仰への導きという順序が必要である。

宗教体験すなわち、修行で得られる意識状態や、それらが心身医学的、精神神経免疫学的に病の治癒をもたらすメカニズムは、科学的にも立証されてきている（上田紀行『悪魔祓い』講談社＋α文庫、二〇〇〇年）。

以下、教師にとつての諸問題をあげてみると、

(1) 新宗教の問題

「平成八年度宗勢調査」によると、回答した四五〇ヶ寺の一〇・五％が新宗教の宗教活動によって何か困ったことがあったという。新宗教に対する知識、対策というものも、これからの教師の身につけるべき課題であろう。そのためには、対応マニュアルの早期作成が必要である。檀信徒の入信、家族の入信、あるいは墓地問題というものが起きている現実を見ると、これからも新宗教の発展によってますます重要な課題となってくる。

(2) 一九九五年の「日本世論調査」によると、宗教に対して、金儲け主義（六〇・一％）、強引な勧誘（四五・九％）、怖い（三七・〇％）というようなイメージを持っている人がかなりいる。本宗教師もこのようなイメージをもたれないよう、研鑽しなければならない。

(3) 教学を学ぶと同時に、日々の生活の中において、それらを体験に移すことが肝要である。「この世の中すべてがお念仏である」「お念仏抜きには私何も語れない。お念仏だけが私だと思う。私のしゃべっていることは全部お念仏」と浄土真宗住職の、ある奥さんは言っている。

(4) 今、巷では宗教間の相互理解と共生が叫ばれている。そこでは、「結局、宗教の目指すところは同じなのだから、他の宗教にも寛容になるべきだ」ということが言われる。しかしわれわれ教師にとつては「日蓮聖人が信解体得せられた法華経」にのっとり、その教義を自ら実践し信解体得し、その真実を他に伝えることによって自他共に、心の平安、世界の平和を実現していくという理想目的がある。この確固たる事実を深く考えることなく、単に宗教同士の寛容さや、相互理解、共生ということを言っても、うわべだけを飾り立てた耳ざわりのよい文句に終わるだけだろう。相手の他者性を認めながら、意思の疎通を図り共生していくことがいかに困難なものかということを実感しながら、しかもなおそこにおいて、いかにして共生の道を探っていけばいいかを模索するという営みがわれわれに課せられる。

(5) 国立社会保障・人口問題研究所の日本の将来推計人口（平成十四年一月推計）によると、平成十二（二〇〇〇）年の日本の総人口は一億二、六九三万人であった。この総人口は今後も緩やかに増加し、平成十八（二〇〇六）年に一億二、七七四万人でピークに達した後、長期の人口減少過程に入る。平成二十五（二〇一三）年にはほぼ現在の人口規模に戻り、平成六十二（二〇五〇）年にはおよそ一億六〇万人になり、以後減少していくものと予測している。

老年人口（六五歳以上）の割合は平成十二（二〇〇〇）年では一七・四％であるが、平成二十六（二〇五〇）年には、二・八人に一人が六五歳以上人口となるという。これに伴い、葬儀の形態も簡素化されていく傾向が出はじめている。

先日、テレビを見ていたら、「最新お葬式ビジネス」というタイトルで、僧侶抜きの、散骨樹木葬、ホテル葬（お別れ会方式）、宇宙葬などが紹介されていた。また、骨壺陶芸教室なるものがあった、そこでは、参加者がめいめい自分の気に入ったデザインをして、将来自分が入るための骨壺を、楽しそうに自分自身で作っていた。

以上のことから、葬儀、法要以外に何かを持っていない教師にとつては、収入基盤が重要な課題となってくる。また、老人問題、ホスピスなどの対策もますます重要度を帯びてくる。

(6) 僧侶としての資質の問題

平成八年度宗勢調査報告書（三月三十一日現在）によると、二〇歳代では「教師としての自覚が深められない」と檀信徒の相談や質問に答えられない」という経験不足からなる問題で悩んでいることが多い。檀信徒の信頼を失うのは一瞬だが、失った信頼を再構築するためには莫大な時間と労力を要する。信頼されるためには、教師はそれなりの知識を備え、かつまた言動が一致していなければならない。教師は人から見られているということも、常に心の隅においておかなければならない。また、檀信徒からの質問に対して、専門知識の少なさを自覚している者は、少なくとも、それを補うようなテクニックを身につけなければならない。沈黙回避のテクニックは、コミュニケーションの危機管理として身につけておかなければならない。長時間かけた布教も、問われた質問に沈黙することで台無しとなる。

基礎的教養に関してだが、遠藤誠が川崎大師にお参りに行った際、祈願を依頼するのに、その目的を「即身成仏」と用紙に記入したら、係りの僧侶から「お客さん、自殺でもするんですか」と言われたということを書いている（遠藤誠『今のお寺に仏教はない』現代書館、一九九五）。

参詣者を「お客さん」と呼ぶようなことは、僧侶としての資質を疑われかねない。また、「成仏とはなにか」ということを檀信徒に問われた場合、われわれはとつさに、適切に反応できることが必要である。

さらに、宗門教師たるもの、次のような誤った知識を、世間に堂々と語るようであつてはならない。

『法華経はだいたい釈迦が死んで千年ぐらい後にできたものです。……法華経は岩波文庫に入っていて、三冊あります。これを読むと、内容はほとんどない。何を言っているかというと、「法華経こそがお経の中のお経」「法華

経はお経の中の王である」ということを、三巻分書いてある。役に立つ教えなど、何もありません』（谷沢永一、渡辺昇一『「宗教とオカルト」の時代を生きる智慧』PHP研究所、二〇〇三）

(7) 二十一世紀に適應する具体的教師像ということでは、現実を起こっているさまざまな問題に対する宗教者としての自覚が問われる。現代は危機的状况にあるという意識を持ち、積極的に社会と関わり、諸問題に対して取り組み、対応していかなければ、日蓮宗というものは、社会的に無害無益の宗教と成り下がってしまう。

日蓮聖人のご生涯が立正安国論に始まり、立正安国論に終わった事を考えると、世界平和の問題も重要な関心事であらねばならない。世界の各地においてはいまだに戦争、紛争が後を絶たない。

今、ビルマ（ミャンマー）では、軍事政権はウンスンサンソーチーさんらの暗殺を謀り、百人以上を虐殺し、二百人に上る人々を不当に逮捕し、NLD（国民民主連盟）はじめ民主化を求める活動・仏教徒を弾圧、迫害しているという状況である。日本政府はミャンマーに対する新規ODA（政府開発援助）を停止したが、すでに進行中のODAは継続することに決めた。税金を使って供与しているODAは、つまるところ、軍事政権を間接的に支えているのである。

私たち教師は総合的にこれらの事業を受け止め、反省し、各々が自己の力量に応じて事態の改善に向けて実践していく態度を起すことが必要である。

(8) アメリカのある教会では、ケーブルテレビを持っており、また映画、ビデオを上映できる娯楽施設を兼ね備えている。理想だが、宗門もこのような総合施設を設立して、劇場あるいはホテルを含んだ施設において、教師の法話が聞けたり、あるいは日蓮聖人関係の映画、ビデオを見られたり、悩み事相談、宗教カウンセリングも受けられるような総合的な施設の設立が望まれる。教師は実際のカウンセリングの現場を覗くことによつてテクニクを身に付け、自坊でそれを応用することが出来る。そこをまた、インターネットの情報発進基地とし、パソコン用の布教用ソ

フトも販売、そしてまたそれに対応できる教師の資質の向上のための講習会も行なえる施設、医師でいうところのインターンが出来るところである。インターネットと教学知識を兼ね備えた宗門の教師像というものも、これからは必要である。

(9) ご本尊とか教義とかは、変えようのない問題である。しかし、組織や運動のスタイルについては、あるいは教学の展開については、いくらでも時代に即したものに換えられるはずだ。

「はとバス」では今、四五人乗り座席から、ゆつたりとした二七人乗り座席に変更し、「癒し・エンターテイメント・居間のような感じ」を前面に打ち出して、日帰りバスツアーを展開している。宗教は一般社会に安易に迎合すべきではないが、しかし、旧態依然とした、時代錯誤の認識を抱いたままであってはならない。今、われわれは、「する宗教」から「楽しむ宗教」へ、という構想を打ち立て、教師と一般大衆老若男女がともに楽しく宗教を体験できるように会場の設立を目指して、社会のニーズに答えていくことも必要である。

美術家の横尾忠則も、次のように言っている。

「大切なのは、生の側から死を見る以上に、死の側から生を確かめるという視点だ。これが定まらないと自分の人生も芸術も実り多いものにならない気がする。さらに大切なのは、生と死の問題を遊びを導入しながらとらえるという視点。遊びは芸術における必要不可欠なビタミン剤のようなものだ。……この遊びは、自分自身から自由になれて初めて可能になる。いや、遊びを実践してから自由になれるのかもしれない」(横尾忠則「いつもそばに本

が」『朝日新聞』二〇〇三年十一月二日)